

地球の真意（４）

1.気候は、そこに住む全ての生命にとってとても重要であり、それがどんなかで、そのままそれは、人間や動物、その他あらゆる植物、鉱物に影響を及ぼす。気候が不安定であれば、不安定な営みがそこには在り、安定していれば、その安定の性質に見合ったある種の定着がそこには在る。気候は、生命たちの生の在り方のその大切な基本要素であり、時空との融合の際のその基礎を支え続ける。いつ、どんな時でも、それは地球の息吹を健康的に運ぶものでありたい。

そこに争いの絶えない世が在るとすれば、その背景となる気候には、不自然さを普通とする歪な安定が在り、そのことを誰も意識することなく、そうである中での生を営む中で、人は争いを起こす。人々の暮らしの中で病気があたり前とされる時、そこには病気の原因に絡むような不健康な気候が在り、誰もそれに（それとの関わりに）触れることのない中で、人は病気になり続ける。

争い事や病気が経済や権威の材料になる程、執拗に病み続ける現代。人間の、生命としての成長・進化が外されたそでの風景は、それが修復と自浄の機会を手に来ない程、それへの人の無感覚が慢性化し、生の営みの基となる環境も自然界も、後戻り出来ない程不健全（非生命的）になってしまっているということ。

HP「無有日記」

<http://www1.odn.ne.jp/mu-mew/>

そこに、不安定を安定させる、その大元となる気候がある。
3 章ではまだその時ではなかった材料を、新たにそのテーマに重ねていく。

2. 静電気を含む水分が、湿気(湿度)として、空気中に停滞する。自然に生じる水蒸気にはそれは無く、海や川の水が普通に循環する時、空間はジメジメとした湿度とは無縁である。それを知ることで、これまで経験することのなかった新しい風景(気候)を知る時を引き寄せる。

意外過ぎる意外として、その不健全な湿気には、蛇が絡む。静磁場と化した蛇が住みやすい場所では、空間の流れを止めるように湿度は高く、そうではないところでは、蛇(の本性)と融合する人間が、静電気脳を活発化させる。この地での異様な程の湿気も、彼らによって下支えされてきている。

その非地球的な動物の代表となる、蛇。彼らの感覚器官は、初めから破壊力の道具として有り、腐敗と停滞の原因を普通に、混乱と衰退を演出する。その目は、前にも触れた、静電気を上手く操る、静磁気のかたまり。そして、形を生み出す原因の次元を漂う時、そこには、その静電気を絡めて重苦しい湿気を作り出す、蛇の鼻(の奥の部分)が在る。それは、実に漫画のような、可笑し過ぎる、恐ろしい原因の事実。

体の中で仕事をする栄養分を取り除いた食物(精白米、白いパン etc.)でもその活動源が足りてしまう程、細胞が不健全さを普通とする時、それに見合った形として、50~60%(または

それを知っていた。

LED 照明が潜める、その凄まじい破壊力。蛇と蛇系の(土偶の原型をルーツに持つ)人間以外の全てを潰し切ろうとするそれには、別な重要な目的があり、それは、地球と共にどんなことがあっても生き存えてきたその彼ら(音の送り手)を完全に消滅させること。それ程、彼らが備える能力を、非人間性を普通とする嘘の人間たちは恐れている。それを外しては地球がどこまでも思うようにはならないことを知る、非地球の支配の意思は、形ばかりの人間の、その数と量の力に LED の原因を流し、その具現を実現させる。

異常を普通として生きる病みの素のような人間たちが最も恐れるその存在に、自由に活躍してもらおう。彼らとの融合は、その質の高まりと共に、地球規模の望むべく原因として、どこまでも成長し得るもの。それがここで始まる。この今の EW でそれを感じ、全く今と異なる地球本来の未来から、この今を眺める。地球の真意が、地球の喜びになる。(by 無有 3/05 2019)

巧妙に、地球自然界を病ませる動きを取る。

極度の焦りと怯えの現れでもある、現代における急速な LED 化の流れ。その嘘の原因が、繋がる未来を持ってない程浄化されているこの流れの中、未来への責任として、形ある LED 照明を外す。それは、一生命としての生き直しの機会。その原因の始まりは、内なる生命本来の選択であるゆえ、思考を巡らす時間は要らず、ただそうである自分が居る。

そして、地球を安心させる。生命たちの未来を健康にする。二度と通らなくてもいいこの一度切りの時を、地球に捧げ、地球と共に生命を生きる。記憶の中の本当の地球が、太陽に連れられ甦る。

10. その LED 照明の原因の中には、地球にとっての、これまでの無くてもいい経験のその全てが在り、音の送り手はそれを知る。地球と共に居るから、それは地球感覚の原因を普通に連ね、人間時間を経験する生命たちのその意思を真剣に支え続ける。これからは、彼らはこれまで以上に、次なる原因の変化を応援する。

感覚的理解の中に入り込もうとするその存在を、手のひらで感じてみる。それで OK。それまでの経験を引き連れた思考からのものでなければ、必ずその試みはそれと繋がり、融合する。ここまで来て、更なる(EW の)次へと繋がる今に居るから、それは可能となること。それを地球は嬉しい。それがどれ程の変革の原因となるか…。それぞれの生命の意思は、どこかで

それ以上)の湿度を常に欲するようになる。人間にとって大切なのは、静電気を含む空間から自由でいられること。そこでは、空気も水分も健康的に流れて本来の仕事を発揮するので、当然、湿度は 30%前後(~40%程)となる。健康で平和な風景には、高湿度の空間は無い。

3. 高湿度の空間は、心ある感性を脆くさせ、心身の快活な動きを封じようとする。そこに隠れた静電気の、その動きを止める異様な力。その空間を良しとする世界発の価値観は皆、非生命のそれと理解する。湿気は、心の無さと相性が良い。

元々それ(妙な湿気)が無かったことを知れば、取るべき選択と行くべき先が分かる。太陽の光を遮るようにして在る物や居る存在を、生活の中から切り離す。過去に居座る流れない価値観から離れ、人としての滞りの無い原因を生きる。そんなところから、静電気が力を無くす流れへと時は変化に乗り、30%前後の湿度の心地良さを普通とするようになる。

変温動物の中でもその異質(変質)度を強める蛇の居る地域で、それ関わりの価値観や習慣を脳に馴染ませていると、爽やかで健康的な(湿度の低い)空間に居ても、心身を病ませてしまうことがある。それは、その人の本心が、滞りを望み、調和ある在り様のその原因にも違和感(嫌悪)を覚えているから。(そんな人の影響下に居て心身を病むこともある)蛇絡みの全てから自由になり、そうではない心身を育んでいく。

静電気(静磁気)は、気圧にも湿度にも密に関わっており、

そこに居る人間の性格や気性にも絡む。そうとは分からせず
に暗躍する、静電気。それへの EW と遊び、普通に健康でい
るその底上げを楽しむ。精白穀物のパスタ(パン、米、餅 etc.)
や海塩を常食とするだけでも、不健全な湿度を支えていると
いうことを知る。

4. 巨大な太陽の光に包まれる地球は、どこの場所も、温暖で
爽やかな気候を普通とし、そこに生きる生命たちは、その中を
自由に行き来し、自然の一部となる。気温は、寒過ぎることも
暑過ぎることも無縁で、地球は、いつ、どの時も、全てが楽に
平和に生きられる空間を太陽と共に工夫しながら創り続け、
微生物がそれに協力する。

ところが、その普通は、海水が塩分を含み始めた頃から崩
れ出す。地球にとって要らない経験となるそのことで、大気
の成分は段階的に不自然なものへと変わり出し、水蒸気の質も、
太陽の光を違和感とする程その様を違わせていく。海水の塩
分濃度の差異は、不穏な影響力の原因となって地上空間の
熱の伝わりを狂わせ、太陽の光が(地面に)届きにくくなる地
域や、放射されにくい熱空間が次第に生み出されていく。

火山活動を余儀なくされた数百万年前、地球の生命力を
押さえ込もうとする静電気(静磁気)の動きは活発で、それ
により、地磁気からの磁力線と地電流の働きは、本来から外
れる。それでも、静電気のかたまりを次々と地中から放出し得た
ことは、地球にとっては実に大きな安心の材料となり、どうに

は、自分たちが何より嫌う彼ら(音の主)の真の力を恐れる。そ
れと共に居る普通の人間たちの変化にも、危機感を募らせる。
その形無き原因の性質は全て、そのまま居ることも出来ず
に、嘘の身体と共に崩れ出す。

地球の真意に耳を傾け、それに応えようとする時、形の有
無の次元を超えて、生きる原因と、人間としての身体表現が
ひとつに回ることの大切さを知る。そうであるから通り抜けて、
行ける場所。それが普通となるから高め得る、生の原因。

そのために、「人間」があり、「仏陀の心」と「太陽の音楽」が
ある。「再生」「復活」を経てのこの「地球の真意」は、人間時
間のその原因を地球時間と重ね得る、唯一の時。それを楽し
む生命たちの普通が、そのまま地球の真意となる。ふと気づけ
ば、全てが、生命本来をテーマに変わり出している。

9. 「地球の真意」は、地球が人間たちに望む、一生命としての
本来の姿。それは、普通で自然な生の営み。それを阻む力の
原因は地球にとっても厳しいものだから、彼は、彼なりに出来
ることをし、次なる展開の可能性を人間に託す。生命を生き、
人間をやる存在たちが、さらりとそれを担う。

その地球の望みが具現化されようと、そのための材料がキ
レイに揃った、この現代。ところが、そうはさせない不穏な意思
は、これまで蓄積させた負の原因を元に、これ以上無いとい
う程の無生命化の道具、LED 照明を世に送り出す。蛇系の存
在たちは、自らの本性のままにこぞってそれを利用し、狡賢く

くられ、一生命としてのそこでの自然な感覚は守られる。異常を普通とする世界では決してあり得ないそのことをさらに具現化させる、ここでの本来の普通。そうであり続ける事実は、それ自体が理由となり、原因となって、その本来を拡大させる。

そのことはすでに、世を病ませようとする存在たちにとっては大きな違和感となっているゆえ、ここでの普通を大いに活かし、共に変化に乗り、その質を成長させる。彼らが嫌悪する世界を通して自然と為し得る EW もしやすくなる。

そして改めて気づくことになる、耳のどこかに生じる(生じ続ける)、通常とは異なる音のシャワー。強弱や細かさの違いも含めてその時々でいろいろな空気感をもって訪れるそれは、この7章で、その発信元である自らの姿を見せる。ずっと生命たちの人間時間を見守り続けてきた、その音の送り手たち。音は、彼らとの融合の形であり、いつもそこに居て、全てを包み込むようにして添い続けてくれている、その現れである。それが一層の安定感と力強さを見せ出す。

彼らとの時空を超えた密な触れ合いを通して知るのは、彼らほど蛇系の存在たちに嫌われている対象は居ないということ。それを知る時が来たということ。この時を待っていたその音の送り手たちとの時間は、地球のこれからのための、その原因の高まり。共に居る場所を同じに、融合を強め、生命世界のその望むべく変化の時へと一気に歩み出す。

数を力に好き放題無生命化を拡大させようとする存在たち

かその生命活動を修復する機会となったそのことで、地球は守られる。しかし、それまで平穏を保っていた地上近くの大気は、気温差を生じさせるという、大きな犠牲を強いられることになる。

5.3 百万年近く前から始まった、この地特有の火山活動が、数十万年の時を経て次第に落ち着き出した時、そこでは、地域によって平均気温が大きく違うという、それまでは無かった妙な現象が起きる。太陽の光の力を思えば、地球の中で寒々しい地域が有ることは考えられない。その異常がこの時生まれ、この現代まで、それは抗えないものとして続く。

そうなってしまった理由にはいくつもの原因が複雑に絡むが、最も重要な理由としてそこに在るのは、空気中の電流(空中電気)のその不本意な姿。地中から放出された静電気は、空中ではそう簡単には消えることはなく、すでにそこに在る不調和な(非地球的な)粒子に支えられるようにして、それは、異常を普通とする働きをする。

極端な寒暖の差は、本来の自然な流れを忘れた空中電気が、無生命化を愉しむ意思によって操られているため、静磁気が活動的でいられる地域では、それに反応する空中電気が太陽の光の力を簡単に遮り、寒く厳しい時が作られる。都合良く移動するだけで、流れることのない静電気は、空中の電気の流れを滞らせ、熱の伝わりを鈍くさせる。地球にとっては、地殻を流れる地電流の健全さが重要となるが、地上で生

きる生命にとっては、気候をある状態に固定させる空中電流の存在感の方が大きい。

「復活」で静電気の正体(本質)を知り、重力子や電子の実際(次元)にも触れた経験は、地球が本来の気候を取り戻すための、その力強い原因としての新たな仕事を楽しんで担う。ここに居るということは、そういうこと。みんなで、地球らしい地球の気候を創り出していく。

6. 脳の中に居座る静電気(静磁気)を、地磁気や地電流を刺激しつつ解放し、それ関わりの経験の記憶(の原因)を段階的に浄化し得た、これまでの確かな時。気候は、人間経験のその本質となる部分にまで気づかれずに影響を及ぼすものであるゆえ、それへの EW は、求めず、向かわず、ただ原因のままの自由な遊び心として表現する。厳しさも辛さも全て不要となる気候を、遙か昔の風景からここに招待する。

そこでは、太陽の光に仕事をしてもらおう。太陽の光を避けようとする、(空気中に在る)本来そこには無くてもいい不穏な分子(原子)は、誰よりも太陽が知る。彼に、その力無くさせられた空中電気(空気中の電気と静電気)を包んでもらい、そこに在る歪な粒子も含めて、酷い寒さや暑さの元を浄化してもらおう。これまでの EW を経て、太陽の普通は、その光(輝き)の力を自由に活躍させ得る本来を手にする。空中電気(電流)も、この時を待っていた。

太陽にも有る、彼が誕生した時の、その手前となる原因。太

容も拒否・抵抗の対象となる。それは当然と言えば当然の話。そのことを改めて EW に活かす。そこに在る、この社会環境が大きく病んでしまったその原因と、それと関わるいくつもの出来事や結果に留まる形や物。直線的ではない感じるままの EW の材料にそれらを活用し、より深い次元の負の原因浄化に役立てる。

テーマはもちろん、蛇や蛇と融合する人間が嫌うこと(もの)。それらは、無有日記と融合する人にとっては嬉しい原因を備えるものばかりだから、無理は無い。そして、そのプロセスで、重視すべき点、保留すべき点などを把握する。何気に主導権を握り、その意識もなく原因の世界への責任と実践の質を高めている自分が居る。

その実践から動き出すものや変わり出すものを自他の中に見る時、何もせずとも為し得る原因の働きかけがそこで自然に行われていることを知る。それは、存在の質の変化・成長を意味し、依存も期待も何も無い中で、全体にとって望むべく変化が流れ出しているということの現れ。そして、原因の質の変化からは無縁で居ようとする存在たちが、何より嫌うもの、どこまでも避けたいもののそれぞれの重要度を感じ取る。ただ感じるだけで OK となる EW の質(影響力)は、それにより、自動制御のようにして自由に広がり、力強くなる。

8. 柔らかな感性を備える普通の人、無有日記に触れているだけで、中庸のシールドのようなものがその原因の中で形づ

それを言葉にし、その言葉に自らの原因を乗せる。そのことで変わり得る世界のその質を観察し、強く、しなやかに、未来への原因を成長させる。表現することで原因を高め、高めた原因をそのままに、表現し続ける。

その時、ふと感じるもの、思い浮かぶものを材料に、EWを試みる。ただ感じるだけでいい。そこに動き出すものがあれば、それを繰り返し、それに続くものがあれば、それに移行する。そのひとつひとつが皆、不可欠なプロセス。無有日記の世界に居れば、そのための(中庸と全体の)原因はいくらでも供給される。

内容よりも質が優先される原因のEWは、何を材料にしても、反応を呼び込み、何もしなくても、変化の原因は活発になる。だから、いつ、どんな時も、さりげなく真剣に生命を生き、人間をやる。そこに、意識を向けて欲しいものや形が訪れ出し、その原因は大きく動く。人間全体の生命本来は、確実に具現化へと向かう。

7.大切にしようとする形ばかりの行為で人として大切にすべきものを無視し続ける、人間本来からも大きく外れた存在たち。彼らは事の本質そのままの無有日記の次元を避け、原因を生きるという、人間の生の基本にも背を向ける。それでも通用する環境を皆で上手く作り出し、人間世界を、非人間性と非生命的価値観で覆い尽くす。

彼らにとっては、そこに在る原因だけでなく、無有日記の内

陽により元気になってもらうために、94億6443万年程前のその時の、その1年前の太陽を感じてみる。それを普通とする無有日記に、彼も嬉しい。その時の彼の想いに触れ、改めてこの今を生きる。生命たちには、とても懐かしい時である。

7.そして、人間がそこには住めないために、それは思考の外側となるが、海の気候への影響は大きい。海は、地球自然の生の源である。

かつては、太陽の光を海中のあらゆるところに届かせていた海。海水の循環は健康的で、海水温も大きなひとつのサイクルを滑らかに動かし、穏やかで柔らかな状態を安定させる。地熱は自然に海水に伝わり、太陽の光でそれは廻り、生命力の原因となる。

地球全体の平穏さと、生命たちの活動を支える、地球表面の多くを占める、自然で豊かな海水の環境。それが塩分を含んだことで、気候の大切な材料となる水分の循環は滑らかさを失くし、海と太陽との繋がりも不調和となる。そこでも、静電気が悪さをする。

地球には無いはずの不安定な(原子核の)粒子がその成分となる、海水の塩分の中身。静電気は喜んでそこに住み着き、非生命的な海水空間を作り続ける。太陽の光は、自由な働きを削がれ、風や雨は、その海水の影響を受けて、地球本来から外れた気候の材料となっていく。

そこに在る、凝り固められた負の原因から離れ、そうであり

続けるその重たい連鎖が砕かれるであろうその時のために、海の塩関わり(の次元)を無くす流れを馴染ませる。岩塩の成分とそれらの原因との融合は、廻り回って、地球環境とそこでの気候の質を本来にする。海の塩に支えられた環境(価値観)は、それだけで、無くてもいい気候変動のその形無き土台となる。

8.気候によって、人の暮らしや動植物たちの営みが、そうとも分からずにその深くから影響を受けていることを知る。そして、人の切ない感情や動物たちの悲しみがそこに在れば、すでに気候は、かなり本来からかけ離れてしまっていることも知る。

その気候関わり(の次元)のその原因の学びとして在る、現代。そこでの何でもない EW を通して、それらの原因が浄化されることを体験的知識の域に収められたら、ここに在る、健康的とは言えないこの環境の中から、健康的に、心のままに、人の暮らしと動植物たちの営みを変えていく。気候が変わるその時を待つのではなく、気候がどんなであれ、一生命としての人間時間を、人として生きる。共に生きる生命たちの安心を普通に、自然界を大切に作る。

不自然な気候が原因としてそこに在ったとしても、それを理由に生の質を低下させてしまえば、受容も実践も、地球感覚を外れる。「地球の真意」に触れることで変わり得る原因は、それが力強く回転して、不調和などどこにも無い自然な気候を引き寄せる力となることで、その役を果たす。ここに居る生

彼らの姿や出来事と一緒に、新たな原因が力を手にするというもの。形無き原因の性質が、地球が嬉しい次元の変化に乗っていることでもあるそのことは、人間世界のその生命本来への変化に、思いがけず、厚みと深みを添える。

直感(の次元)は、少しも思考の次元には触れないところで自在に仕事をし、それに応じた形ある物や事実を順序よく浮き上がらせる。ひらめきは、その理由を持たずに活躍し、透過する次元を自由に変えながら、そこに在る原因と、結果という名の(次なる)形ある原因とをキレイにひとつにする。そして、動かざるを得なくなる彼らの怯えと怖れの芯を、楽しく処理する。

6.蛇に支えられる嘘の人間たちが特に嫌うものは、自然とそこで形となり、蛇の意気は、大きく力を無くす。それは、思うだけで事が勢い良く進行する、多次元的な原因の浄化そのもの。原因の世界は、どこまでも深く風通しを良くし、どこまでも広く、滑らかに、それは回転する。

ここに在り、これからもその質は変わるであろうそれは、ふとその時の訪れを実感する何気ない日常の中で、自分にとっての普通となる。知ることから始まる次元には無いゆえに、それが言葉となる空間は、ここには無い。これまでの経験全てがその原因となって、今、それは招かれようとしている。その流れに任せ、そこに在る原因の意思に時を預ける。

未来のために、そして地球自然界のために、この時代に在ってはならないことを、生命本来の次元から眺める。そしてそ

蛇が何らかの形で関わる教えや形式を大切にしている人間の、そこに隠れた非人間性を余裕で観察する。そこに蛇は居て、人間と共に、彼らは普通と思える異常を実践する。

重く、動きの無い感情を満足(安定)させるために、結果(過去)に留まる知識ばかりで思考を忙しくさせてなければならぬ存在たち。彼らが執拗に避け、狡賢く人にさせようとする物事の原因が動けば、一層力を入れざるを得なくなるその嘘を通して、彼らが決して触れたくないもののその意外性までが、蛇が困る程に顕になる。そのことを楽しむ。

5. 滞りを普通とする空間の中に居ても、そこに在る動きの無い原因に侵されずにあたり前に変化に乗る自分が居ると、その無意識の力で心ある風景を破壊しようとする存在たちの、その嫌悪の対象を通して、彼らの本心がそれとの縁を恐れるという世界(事柄)に共通する、その原因の性質を体験的に感得するようになる。

そこに在る、事の手前の形無き原因への責任放棄と、中庸と全体という生命本来への完全拒否と否定。それを知る時にはすでに、その存在たちが嫌う性質の原因を自らの中で成長させていて、それだからこそ分かり得るその次元の姿が、そこには在る。いつのまにかそうである事実を通して、原因の次元から、更なる余裕と実践でその深くへと入る。

そんな中で経験するのは、蛇系の人間が忌み嫌う物を把握すると、その元の原因までが同時に動き、ふと意識を向ける

命たちは、そのための EW と自由に遊び、確実に気候を変えて、環境を、時代を、生命本来のそれにする。自分たちの変化に、気候が反応し、気候の変化に沿って、それぞれが存分に生命としての人間を生きる。

太陽は、その輝きを増し、地球は、どんなところにも太陽の光を届ける。動物も植物も、太陽の元気を喜び、自然界は、不自然さを知らない気候を普通としていく。人間は、太陽の光に包まれ、何も無くても全てが有る時を共有し、それを広げ、高めていく。そこに争い事は無い。病気も不安も隔たりも無い。風と雨は優しく、雲はのどかな時を彩る。気候が、安心して地球の元へと戻る。(by 無有 2/10 2019)

地球の真意（5）

1. 仮説からなる世界は、その始まりが、結果や目的へと向かうその直線的な思考からは自由ではないため、そこでの必要性は、その意識もなく変化し続ける原因の次元を遠ざけ、心ある柔軟な感性の中に自由に訪れようとする（原因のままの）直感も感覚も無いまま、それは進行する。求め探す姿勢を基とするために、それは、どこまでも経験枠内のことであり、当然経験の外側との出会いは経験できない。

つまり、仮説は、それがどんなであれ、力を手にしてはならないということ。そこに権威の類が関われば、自然体でいる心ある原因は力を無くし、人は、自然に変化に乗ることへの抵抗と無責任を馴染ませる。そんなところに、世の科学は在る。

しかし、その意味の無さゆえの結果（形）をいくつも残したことが、人に真の意味を気づかせるその材料になっていることには、価値を置いてもいい。科学が導き出した、その限界の中での思考型の（尤もらしい）現実は、その奥深くの原因の次元へと感性が遊びに行けるそのための面白い機会となる。科学は、決して科学の域（次元）に居てはならないことも伝えてくれる。

一生命としての真の普通を切り離れた科学の次元は、生命本来の掌の上に在る。地球感覚という多次元的な意思は、生命としての真の在り様から科学の土台を見、人間世界特有

も重量級となるもの（怖れの対象）は、彼らの誰もが引いてしまう程の影響を被るということ。もうすでにそれはここに在り、それと遊びながら、文章を書き進めている。

4.2 章で記した、静電気を巧みに操る、蛇の目と脳。蛇系の人間は皆そうで、強くそれを働きかける必要性がそこに在れば、蛇は、その人を強力に支援する。心ある普通の人は、いつの時も元気ではなくなる。

そんな蛇にも、蛇に見守られる人間にも、目に入れたくないものがある。分かりやすいところでは、柔らかな感性を持つ人の元気な姿。理由もなく楽しそうにしている人の姿は、耐えられない。彼らには、不安の裏返しの安心と差別心に支えられた喜び以外のそれらは、理解できない。心が無いため、心の無さが不要に揺れ動かされ、それまでに覚えた心ある言動の扱い方（振り）も困難になる。

見たくないもの、触れたくないものは他にもいくつもあり、湿度の低い空間や青空（太陽）もそうである。その時その場所で彼らの姿を見ながら、感触の違い（変化）を感じ取り、原因の深みや影響力を観察する。そして、そのひとつひとつをさりげなく消化し、淡々と先へと行く。

それを言葉（文章）にすれば、自らの原因の成長にも弾みが付く。気づけば、それまでとは同じに行かないことに彼らは焦り、不安だけで出来た中身がこぼれ出す。彼らと繋がる未来は、どこにも無い。

「地球の真意」で創り出していく。そして、そこから(彼らから)届く未来を外す。そのあり得ないことが、彼らのそのあり得なさに対処する中で姿を見せ始める。

3.およそ 3 万数千年前、奇形(土偶の実)を経て人間の身体を手にした、人として必要とするものを不要とする、形ばかりの人間。蛇の獰猛さとその非地球的な能力をそのまま引き継ぐようにして人間経験を始めたその存在たちに、心と感性は無い。生の必要性も、欲のむさぼりと、支配・征服欲を基礎とするため、そこでは、破壊(攻撃)と不安定(停滞)を維持するための数が求められ、その中で差別と怒りを共有する。現代の蛇と密に関わる価値観(宗教)は、それを物語る。

極上の嘘の原因で本当らしく本物を生きようとするその存在たちの姿が元から変わり出さなければ、時代は、いつまでも真の変化を経験できない。社会全体のその健全さの原因などとは全く無縁でいる、彼ら。限り無く非人間性を地で行こうとするそこでの次元が通用しない世界を、この 7 章に乗せる。これまでの基とするから、ここに登場する原因は、大きく違う。

その本質が心の無さをあたり前とする蛇同然のそれであることの意味は、その存在たちは皆、怖れと怯えと、不健全極まりない非生命力を内に凝り固めているということ。それは、動き出すためには不安や差別心が要り、普通で居るためには、不健全な(非生命的な)物や食物が必須であるということ。

ということは、他にもその類(次元)のものが有り、その中で

の、この地球自然界には在ってはならないそこでの非生命的な原因を浄化する。そのために、科学に、その間口になってもらう。それが、この時代の、地球が嬉しい科学の仕事である。

2.原子核内の陽子の数が増えることで、その仕事の性質を変える、原子。地球は、太陽と共に、生命世界の必要性からその基本とすべく原子を生み出し、地球空間の調和と変化をテーマに、それぞれを結合させて、無限に広がる物質のその自由な姿を誕生させる。何億、何十億年と時が経っても、地球に居る物質は全て、その原初となる原子の在り方を本来とし、その変化に合わせる様々な次元の生と共に、時を繋いでいく。

ところが、地球時間における遙か昔、太陽と地球との繋がりを壊そうとする、外からの恐ろしく強大な停滞の意思により、地球内のあらゆる原子は、その不自然な動きを強いられて、原子内の調和を崩されるという、あり得ない現実を経験する。太陽が負荷を覚える程のその働きかけに利用された、宇宙線(放射線)。地球の生命力を力無くさせようとする意思は、その威力を拡大させ、原子世界の本来を破壊する。

科学は、著しく崩された原子世界のその結果として在り続ける、不安定の中の安定の姿を基に、そうではない本来を無きものとして動き出す。形を生み出す形無き原因の性質には触れようとはせず、結果として在る形からその元となる原因へと直線的に(思考で)入り込もうとするため、科学は、最初から、事の本質とそこに在る原因の意思は無視される。

それでも、思考で扱いやすい次元へと様々な言葉と解釈で人の理解幅を広げようとしたそのことで、こうしてそれを活用し得る時が在る。生命世界における、そこでの多次元的な感覚的理解と、それにより変わり得る現実の、その原因の作用。科学が永遠に触れることのないそれらのその質を、科学を材料に成長・進化させる。そこに、元素周期表の世界を招く。

3. 永い間、元素本来の姿を忘れさせられた粒子たちは、無有日記の在るこの時代に、そうであった原因が浄化されて自らの真を取り戻すという、奇跡という名の普通体験を楽しむ。その時、自然なプロセスとして登場するのは、彼らのその原初からの記憶の中に在る、調和の取れた原子核の姿。陽子と中性子が同数となる粒子のみで成り立っていた時のそれぞれに、力を与える。

地球の成分を基にその形を成り立たせている、人間の体(細胞)。そして、その生命活動の燃料源となる栄養素全てが含まれる、岩塩。不自然な状態(構成)を受容しつつどうにか生を繋いできた元素は、この現代に、(岩塩関わりの)地球感覚を普通とする次元発の発想で、どこにも無い面白い試みをする。

それは、陽子の数が1つだけ違う隣同士のその気心の知れた元素間で、協力し合いながら、元素本来の原因を膨らませるといふもの。そうであることが実現し得るそのための材料全てが揃うこの今だからこそ動き出す、これまでから、これか

も知らない人間時間の、その原因を具現化させる。次の時代に残せないもののその原因を、そのままにはしない。

2. 人間という存在。そこに一生命としての生を営む人間の姿があれば、いつの時代も、社会は病むことはなく、人が人の命を奪うことも、他者への迫害も差別も存在しない。争い、衝突することのその負の原因からは遠いところで、人は、人間らしい生を、生命として生きる。

そうではない事実の人間の歴史がなぜ連ねられたかのその理由については、これまでも各所で書いてきている。癒されないままの経験の記憶が深くから浄化されるそこでのその原因からなる EW を通して、人は、経験から自由でいる生の基本形を安定させる。原因を生きることによる変化の可能性は、どこまでも変化に乗る。

素朴で柔らかな人たちが心ある想いをそのまま表現できるようになる中で顕になり出した、作り物の人間性で生きる、ロボットのよう存在たち。蛇絡みの本性(本質)を潜めた彼らは、この数千年間で驚く程の多数を占め、人間社会のあらゆる分野で、好き放題そこを支配する。

その残虐性と狡猾さは蛇譲りで、そうとは思わせない動きと、他者の脳を操る静電気で、どんな風にでも嘘を通し、混乱と腐敗を愉しむ。「再生」でも触れた、その世界。その原因となる次元を太陽時間の域にまで広げたことで(「復活」)、彼らの人間経験をこれまでから切り離すという新たな経験を、この

地球の真意（7）

1.長い間、人間世界に在り続ける不穏な様は、その状態を基とする変化とは無縁の人間社会が繰り返しそこで力を持ち続けてきている現れであり、そこに居て、それまでの経験(の原因)を染み込ませている中でそれを本来へと変えるというのは、そう思うだけで、難しさばかりが募る。

しかし、そうであるその事実の原因の中に在るものをひとつひとつ把握し、その質の変化に触れ続けて、次なる原因にその形無き経験を活かす流れに乗ると、何かを意識することもない何気ない時の中で、自らの存在の性質に見合った望むべく現実の変化が、自然に生じることになる。それを、人はこの無有日記で、そうとも分からない中で経験している。

ただそうは言っても、多数を占める人間のその複雑に絡み合った不穏な(非人間的な)無意識によって社会環境は固められてきているため、唯一それを変え得るその原因深くからのその処理・浄化を進めても、時間はかかる。それは、何百、何千年単位になってしまう可能性もある。

人間の歴史上、人が初めて経験する、無有日記の在る時代の、生命を生き、人間をやるという人間時間。この時を支える地球時間と、ここでのその人間時間は、変化し続ける永遠の瞬間の次元ではキレイに融合するものだから、そのことを最大限に活かす。生命本来をテーマに変化に乗ること以外何

らへの力強い原因。在るべき姿を崩されても、尽く力を削がれても、その原因に包まれる中での共に生きてきた仲間との融合は、それだけで、新たな可能性の扉を開ける。元素とその質量数の世界(科学)を通して、それは、生命源と繋がる永遠の瞬間の変化に乗る。

とてつもない能力を備えるゆえに、完全にその意思表示の力を潰された、テルル 104 とヨウ素 106。この 2 つの融合を基に、身体活動の源であり、岩塩の成分でもある主要元素の、それぞれのその癒されないままの原因の記憶を癒す。それは、ナトリウム 22 とマグネシウム 24、ケイ素 28 とリン 30、そして硫黄 32 と塩素 34、カリウム 38 とカルシウム 40。「地球の真意」と連動する歩みを力に、この 5 章ならではのそれらへの EW を実践する。

それを経て触れ得ることになる、炭素 12 と窒素 14 と酸素 16 の、3 つの融合。それぞれの原因が、滑らかに変化に乗り、活動的に本来の仕事をし出すその流れは、次第にこの今の(変化し続ける)原因の中での水素 2 とヘリウム 4 との融合という、太陽にも応援される完全なる時を生み出す。その時、地球本来のための生(身体)を生きる生命たちは、太陽誕生のその原因に包まれ、より地球の意思と重なり合う。

4.岩塩は、そのまま口に入れても、何の違和感もなく自然に吸収され、体の中で自由に仕事をする。一切の不穏も不調和も無い中で育まれたその成分は、全てを生かす、地球の意思

の姿。そこに在れば、それだけで健康の原因が高まるその岩塩を通して、人はムリなく、細胞レベルからの自然体の在り様を安定させる。

岩塩の中には、3 節で記した成分の他にも、いくつもの元素が微量に在る。マンガン 50 と鉄 52、銅 58 と亜鉛 60 など、それらも皆、細胞活動の大切な要素として、きめ細かな仕事を担う。元素本来の質量(陽子と中性子が同数の状態)の EW で、彼らに元々そうであった普通の姿を思い出させる。

周期表の参考箇所は、陽子の数からなる元素番号のみ。それに 2 を掛け、真の普通となる原子の姿を元気にする。それは、この今が可能とする、地球規模の癒し。他にも在る、人間が一生命として生きる上で大切な元素も、本来の質量数をそれに添えた単独の EW で、その原因は癒され出す。

そして、ここでのその動きを阻もうとする存在が、突如姿を見せ、次々とうごめき出す。それは、多くの(殆どの)割合を占める、不調和で不安定な、陽子と中性子の数が異なる元素(原子)。永いこと自分たちが主で成り立っていた地球空間が変わることは、どんなことがあっても阻止すべきこと。不安定と不自然を限り無く固めたことでそれを安定・自然としていたこれまでがそうではない方向へと動いてしまえば、全ての企みにほころびが生じる。その不調和な元素を通る、破壊と腐敗の意思は、抵抗と拒否を強め、それをこれまでにない攻撃的な力へと発展させる。

しかし、そのことは全て承知の上。だからこうして、少しのズ

び込むことも、その道筋になることも、普通に行う。

天体のその磁気からなる生命力を押し込め込むためには、これ程の性質は他には無い、アルミニウム。元々地球には無かったその非生命的な原因は、もちろん太陽にも無く、非宇宙の存在として、生命世界の外側で、変化・成長とは無縁の停滞を生きる。その次元は、地球時間を軽くのみ込む程の力を潜めるといふ、太陽にとっても手強いものである。

天体と接点を持つまでは、物理的な次元を一切無視してそこに在り続ける、形無き破壊の意思だけの存在。宇宙の裏側に住み処を持つようなその限り無く不可解な異様さと異質さは、どれだけの言葉を以てしても、それは思考の世界(次元)に触れることはない。それでも、この「地球の真意」がこうして形になるという現実のその手前には、言葉にならない多次元的な原因が無限に続く。そこに、それは在る。そこに在ることに反応するから、ここまでのそれへの原因が形となっている。

彼らは、これまでもそうだったように、崩壊するまで、その天体に張り付く。この地球は、数十億年もの間、その粒子(電子)の元となる、その形無き原因の意思に覆われ続けていて、それは、全てを知る。もちろん、この文章関わりの世界のことも知っている。ということをごちらが知っていることの意味までは、それは知らない。だから、それを処理する。そのために、太陽はそこに居て、地球は、ここに来た。さらりと遊び感覚で、先へと行く。(by 無有 2/21 2019)

ム27は、非生命的な生き方を支える。

心ある普通の人の中では、健全な感性を容易に鈍らせ、その人の気力・体力を尽く削ごうとする、アルミニウム。体内に居座り続けて、歪な元素たちを操り、悪さをするそれは、(この地球で)生を持つ存在たちが経験する全ての痛み(痛み)のその強力な負の土台となっている。

限り無くその姿を隠し続ける、3個(種)の非地球的な電子。思考の次元では決して出会うことの無いそれらを擁するその原子核の様が調和ある形のそれであるため、アルミニウム26は、普通の顔をして、体内から出ないでいられる(アルミニウム27の電子は13個)。健全さを持ち存える細胞たちも、追い出すことも出来ずに、いいようにそれに取り込まれる。その破壊力に付き合いつつも生を繋いで来ている、生命を生きる人間たち。それを終えるべきその時のために、「地球の真意」はEWをし続ける。

そこに、岩塩が在る。それに含まれる要素は、地球の望みと重なり合うものであるゆえ、元素の世界を本来へと戻すべくその原因が活動的になっているこの今、それを大いに活かす。地球は、この時を知り、その新たな流れを、太陽と共に支える。

8.地球が思った通りの展開で崩壊していたら、すでに地球には居ず、他の時空へと飛散していた、アルミニウムの元(原因)となる、3種の粒子。それは、生命体として力ある天体を破壊するために、宇宙空間を自由に移動し、活動する。宇宙線と呼

れも無く地球感覚を高め、思考をあたり前に自由にさせながら、多次元的原因を普通とする変化に乗る。無有日記は、その時まで何も知らないでいる状態を維持しつつ、全てを知る次元で遊ぶ。生命源からなる原因に生かされる生命世界には、生命としての原因のままの変化しかない。

5.攻撃性を全開にうごめき出したその世界の、そこでの必然となる反動。その中で特に勢いを付けて荒々しく動き出したのが、テルルとヨウ素のその変質を極めた(壊変を重ねた)恐ろしく歪な粒子。そこに、不安定度を驚異的に高めたセレンと鉄が加わる。地球の辛さを生み出すそれは、地球が嬉しい力強い原因の中で、身を隠すことも忘れさせられる。

見つけられたことだけを基に事を進めようとする、そう簡単には見つけることの出来ない世界でのそこでの普通は、思考の外側となる。経験からあたり前に自由でいて、思考を働かせずに居る自分を普通とする中で経験する、原因の質が変化に乗る、生きた、生命としての思考。そこでは、簡単に見つけることの出来ない世界との融合も自然となり、自らの原因と呼応するようにして、そこに在る原因は形になろうと遊びに来る。

人間の思考の次元には永遠に姿を見せないものばかりで、地球自然界は成り立っている。見つけようとするその姿勢自体が、見つかるものの次元を低下させ、思考を強くさせた分、本質無視の自己満足だけがそれに付き合う。そのことを普通

とする時、必要なだけ、必要なことが、次なる原因の姿をしてごく普通に見つかり出す。

地球がその原因深くから癒されようとするこの時、それを阻止しようと躍起になっている粒子は、テルル 128(130、126)とヨウ素 127(132、128)。本来のテルルとヨウ素が甦ることのないよう、それらは対のような姿で、その原因を破壊する。しかし、それが形になるというのは、それへの対処がすでに為されているということ。科学の次元の思考世界に、それら(粒子)は無い。

そして続く、セレン 79(78、80)、鉄 70(66、68)。その質量数も、そこへと向かえば、永遠に分かり得ないもの。そこに在る現実のその原因の変化を望む時、原因の世界に居続けることによる何でもない感覚的理解のみが、それを可能とする。原因は、その分母(その更なる原因の細かさ)に見合った反応を、あらゆる(粒子の)次元で導き出し、創り出す。

6.理由の分からない不調や痛みを通して知り得た、そこに在る、静電気と静磁気のその負の影響力。ある存在の無意識の意思(危うい本性)が引き金となって、いつ、どこでも生じるそれは、細胞の中に染み込む海塩や非生命的な食物のその流れない原因にも支えられ、時にしつこく、時に強烈にあり得ない現実を生み出す。それを仕向け、操る側で、素知らぬ顔で人が問題事に巻き込まれるのを面白がる人間は実に多い。

その静電気(静磁気)であるが、地磁気(地電流)を刺激し

地球本来の元素たち。彼らのその原因の意思を招き、みんなを甦らせる。そのために、「地球の真意」のEWが在る。地球の望みに応えるというのは、そういうこと。

7.地球本来の周期表 13 番の物質には、12 個の電子が在り、そうではない物質には 15 個在る。前者は、13 番の後方に居て、その全てを壊されたまま何も出来ずに、時の流れからも外されてしまっている。後者は、自らが関わった不調和な元素たちを見張るようにして、身代わりの背後に隠れて、そこに居る。それは、地球誕生から 20 億年以上も経った後に地球が経験した、その歴史的変異となる悲しみの姿。その衝撃的な経験と痛みは、39 億年過ぎても、癒されないままである。

地球に託された、地球感覚を普通とする生命たちは、アルミニウムの影響下に居ながらも、それを外そうとする力を備え、それゆえ、時に敏感にその負の作用に反応し、厳しさと辛さを覚えさせられる。

しかし、そのことは、体験的知識の材料となり、それへのEWの質を高め得ることになる。静電気絡みのアルミニウムの力によって、脳の働きや心の動きを不自由にさせられても、決して失うことのない生命の意思(心の芯)で、淡々とその原因への浄化をし続ける。

アルミニウムを取り込んでも平気でいられるのは、蛇と蛇系(蛇絡みの生のルーツを持つ)人間だけである。不安定源となるアルミニウム 26 は、凶悪さと狡猾さを安定させ、アルミニウ

素の世界に張り付き、地磁気の流れを遮って、そこに不安定感を生み出す。酸素を取り込み、それを変質させて自らの質を強固にし、岩石の中に居場所を確保して、地球の一部となる。

そうであれば必ず動きが止まり、衰退へと向かうはずの地球が、変動を繰り返しつつ、その姿を保ち得ているそのことに、その粒子に潜む破壊の意思は戸惑いを覚える。「復活」には、その後の地球と太陽系が在り、人間の知が触れ得ないその次元に、そこでの必要性からなる言葉が乗る。そして、「復活」でその質を高め得た(分母を増大させた)原因は、この6章を通り抜けようと、より活動的になる。

異常さを普通とするその不自然な次元に居つつ、どうにか守り続けてきた、地球の生命力。全てが歪であるその状態が変わり得るといふ、地球初のその経験は、その歪な物質で出来た人間の体の中での変化が、そのための強力な原因の力として大きな役を担う。地球は、人間のために、そこで必要とすべく全てを残し、ここに繋がる全ての時をキレイに連ねて来ている。分子・原子レベルの変化を伴う人間にしか出来ない体験的知識を、ここで更に進化させる。その中に、地球が確実に再生・復活する原因が在る。

形ある姿が見えなくても、そこに在るべき本来のその原因は、全てこの地球の中心に在る。そしてまた、その原因は、「再生」に登場した生命たちの、その心の芯の中にも在る。

アルミニウムの原因繋がり地球規模の変異によって、現代ではどこにもその姿が見えなくなってしまった、いくつもの

ながらのそれへのEWを通して、自らとその周りの静電気を少しずつ力無くさせ得たことのその経験は、貴い。そこに、岩塩の原因が加わったことで、静電気による負の働きかけのその土台にはひびが入り、そこから、静電気への更なる対処の時が引き寄せられる。静電気の悪さに協力していた物質の、その姿が見え出す。

地球の核は、純粋な鉄で出来ており、マントルも地殻も、ここからの地磁気を元に地電流を流動させ、その鉄成分と融合する、強い磁性を備える物質(鉱物)を中心に、地球は守られ、自浄力を活動的にする。

しかし、地表辺りでは、歪なものへとその原子(元素)の質を変えられた鉄による様子を普通とし、地球の自浄力が行き届かなくなったそこに、次々と静電気が居場所を手にするようになる。その変えられた鉄の原子は、静電気の食糧のようなもの。それは、静磁気を支え、静電気と一緒にあって、非生命的な現実を難無く生み出していく。

その中でも強力なのが、鉄 70(66,68)。その粒子のために、どれ程の要らない時を人は生きているか。動植物たちも、それにより、受容の度合いを高めざるを得ない時を生きている。地球が不自由さを覚える程のその重量級の負の原因の中に在る、歪な鉄。それらを浄化する。地球は、実に大きな変化の時を経験する。

7.非地球的な性質の鉄に支えられる、静電気。互いに助け合

い、仲良く地球を病ませる彼らは、人間の体の中でも意気を合わせ、調和の取れた編成で、力強い不調和を生み出していく。中でも、脳と腎臓(肝臓)は彼らのお気に入り、好きなだけそれらを操り(弄び)、問題事の原因を膨らませる。健全な動きを止める、幾層にも重ね得た静磁気のその隠し場所として選ばれたリンパ節は、静電気の格好の遊び場となる。

鉄を運び、鉄の仕事を支援する、血液。と同時にそれは、静電気も運ぶ。嘘鉄は、実に厄介な物質である。その血液内の鉄は、肺で酸素と結合し、それは身体細胞全体に巡らされて、生の活力源の基礎となる。彼ら主導によるそこでのその仕事、まさに身体レベルの不可思議極まりない現実のその根源となる。

本来そこには無いはずの鉄によって地表を侵されても、地球は、その内部の無尽蔵の酸素によって、大気中の健全な酸素はどうにか失わないままにいる。それを思うように出来ない無生命化の意思は、非地球の原因そのものとなる蛇の、その静磁場特有の能力を活かす。その蛇の生絡みで、(奇形を経て)形ばかりの人間を作り出し得た時、その存在は、健全な酸素を不健全なものへと変える、地球内の鉄とは全く相容れない(地球の鉄本来の仕事を押さえ込む)不気味な鉄を、その中に染み込ませる。

鉄 70(66,68)は、あり得ない現実だが、酸素 16 を 18(と同質の原因の物質)に変える。地球と融合する酸素を決して体内に入れたくない蛇系の存在たちは、(その原因のところ

が生み出されるという、地球にとって、とても力強い原因の時であると言える。人間の生活空間に様々な形のアルミニウムが登場したことも、ここでの歩みが、そうであるその時の貴重な機会となっていることを現す。そのための材料がこうしてここに揃う時、これまでの経験は全て、次なる新たな次元のその実践(EW)の道具に使われ出す。

そして、そこで、地球が守り続けてきた地球本来の 13 番(陽子が 13 個)の元素は甦る。地球自然界は、不調和な元素の存在を持たない時へと動き出し、動植物や人間の生きる環境では、不安や争い事の下地で在り続けていた不穏な物質(粒子)が、その原因深くの次元から力を無くしていく。地球本来の元素としての姿を手にした彼は、地球のために、いくらでも、どこまでも仕事をする。

もちろんそれは、この「地球の真意」を通してのこと。「太陽の音楽」や「再生」を経てのこの時だから、ムリなく、普通感覚で、彼は活躍する。無有日記との融合を普通とする中で、自由に変化に乗り、成長した原因がそこに在るから、本来の 13 番も、安心してそこで活かされる。彼の存在は、地球の望みそのものだから、同じようにそうである生命たちのその原因とひとつになって、彼は生きる。

6.地球全体を安定させる仕事を担っていた物質を尽く潰して地殻内に入り込んだ、アルミニウムの元となる原因の、その 3 種の粒子(電子)。彼らは、酸素と共に地殻全体を支えるケイ

現在も、その時の破壊と停滞の原因を色濃く潜めたまま在り続ける物質(元素)。それが、アルミニウムである。3種の粒子(電子)から始まった地球規模の脅威は、地球本来の姿を、その原子レベルから崩して乱れさせ、不自然と異常を安定させながら、それを自然なものへと変えていく。現在アルミニウムとされる物質のその原因は、数十億年前から、その非地球的な恐ろしい能力で、そこでの負の原因全てを支え続けてきている。

そのことが無ければ、ケイ素 30 も酸素 18 も存在することは無かった、原子の世界。セレン 79 も鉄 70 ももちろん無く、地球の構成要素は皆、調和と安定を普通とする元素だけで成っていた。自浄力と抵抗力を落とした地球空間には、外からの放射線(宇宙線)が自由に降り込み出し、歪で不安定な粒子ばかりの地球が出来上がっていく。

5. 宇宙空間の普通からだ、人間誕生(登場)の時よりも遙か昔に終わっていた、地球。天体規模の負の力に抵抗するよりも、何があっても持ちこたえるというその負けない力(の原因)を強めることだけに比重を置いた地球は、太陽の力添えもあり、奇跡的にも生き存える。そのことが、この今と、原因深くで繋がっている。

この現代における科学分野での、元素世界の知識。百数十年前には無かったことを考えれば、この「地球の真意」の現実、そのことに付き合う生命たちと共に 39 億年振りの変化

で)蛇と繋がる凄腕の鉄に酸素を扱わせ、それを変質させる。そして、静電気脳を安定させ、心の無さと非人間性を普通に、嘘の人間がまかり通る世を支え合う。その怖さは、異常という言葉が可愛く思える程。

理由も分からず頭がボ~っとして、思考や感覚に不自由さを覚える時、そこには、歪な鉄によって運ばれる、壊れた酸素と静電気が絡んでいると考える。そのことに対応するために、地球が全く病んではなかった時の鉄を岩塩から摂り、それ関わりの EW を進化させる。確かな原因をここに繋ぎ得た生命たちのその細胞(の原因)の中には、かつての鉄 52 も酸素 16 も在る。この時、岩塩内の成分は、地球となって生命たちを支える。

8. 地殻を構成する元素の中では、酸素の次に多いケイ素。それは、地球上の全ての生命の源として在り、人間の体の中でも、血管や臓器、目や骨、髪など、全ての細胞組織を構成する重要な元素としての仕事を担う。

それが、7 節の酸素の時と同じように、体内ではその原子核を操られて、地球本来のそれではなくなる。そこでのケイ素 28 の原因は、不調和な 30 のそれとなり、静電気の遊び仲間として、体中のあらゆるところで、違和感や痛みの原料となる。その変異を容易に生み出し、そうである状態を維持させているのが、その姿を変えたセレン 79 である。

生命活動の燃料源としての仕事を主とする酸素に対し、大

小様々な生命体(組織)の構成要素である、ケイ素。地球の地殻は、この2つの元素で70%以上を占め、そのことから、酸素とケイ素の存在がいかに重要な役を担っているかが分かる。それは人体でも同じ。それらが非生命的に変えられてしまうことのその不可解な現実、人間の無くてもいい経験の、その堅固な負の土台で在り続ける。

地球のどこにも無くてもいい鉄 70(66,68)と、セレン 79(78,80)。そして、それらによってその質を大きく歪なものへと変えられてしまう、酸素(16→18)とケイ素(28→30)。心ある普通の人の心身の不調は全て、それらとの関わりを持つ中で生じるとしてよい。

そのことがこうして言葉になる今、そのためのEWは確かなペースで動き出す。そうであった事実が、そうではなくなるその時のために、これまでが在る。元々は病気も争いも、不穏な天候も無かったわけだから、それらの原因は必ず浄化される。

9.微量でありながら、体の中で重要な仕事をする、鉍物(無機物)。それが意味するのは、人間の体は地球であるということ。その余りに当然過ぎる話を基に、健康・健全を思う時、それら(ミネラル)は、地球が嬉しいものでなければならぬことを改めて理解する。そして、唯一そのことに応えてくれるのが岩塩であるということも、人は普通に知る。

見方を換えれば、岩塩が普通に馴染んでいる身体であれば、不自然さを遠くに、調和ある心身がその意識もなく保たれ

の仕事さをさらりと普通にこなし、自らも生命力そのものとなる。彼を通して、地磁気はその能力表現を拡大させ、電流は、彼の中でその地磁気と融合して、全ての活力源となる。ケイ素も酸素も、安心して地殻を安定させる。

その地球の生命線のような物質の中に入り込んだ3種の粒子は、地球空間のどこにも無い構成要素を持つ元素となるべく巧みな働きかけをし、そこに住み着く。場所は、原子核の周りの電子の次元。そこに居る12個の電子を難無く支配し、自分たちと合わせてなんと15個という、恐ろしく歪で、攻撃的な(放射性的)作用をもたらす元素となる。そのあり得ない破滅型の変化の中、元在った姿は消滅し、地殻内の元素たちは、不安定な時へと向かわされることになる。

4.地球内に侵入し、そこに在る物質の原子・分子の次元を混乱させた3種の粒子は、陽子を13個持つ元素の中に居て、この現代に至り、その原因はそのままである。中性子は、同数の13個。それだけを見れば、調和の取れた、自然で安定した元素であるが、そこに15個の電子が在るというそのことで、それは驚異の不安定物質となる。

その存在のために、地殻の構成成分となるそこでのあらゆる元素は、陽子と中性子の数が異なるという、それまでに経験の無い非地球的な現実の中に入り込んでしまうことになる。当然それは、大地を包み込む大気にも及び、元々地球空間に在った本来の元素は、次々と力を無くしていく。

受け、地球表面のそれまでの柔らかな色合いや生き活きとした鮮明さは失われていく。

そして地球は、かつてこんな風にして何かが不本意の中で変わり出し、全てが終わって行ったことを思い出す。その経験の記憶を辿ることの大切さを覚え、宇宙空間における重要な原因として、その意思(地球)は、地球時間の中にそれを残す。ここに誕生したことの真の意味が、その出来事によって、大きく刺激される。

3.3種の粒子が脇目も触れずに接近したものは、地殻内のケイ素のまとめ役のようにして彼らを見守り続けた、強い磁性を持つ鉱物。それは、地球が最も信頼を寄せる物質で、地球全体の健全な磁気の流れのその重要な通し役(繋ぎ手)としての仕事を担いつつ、地殻内の成分の調和を支え続ける。

粒子は、その物質の原子内に侵入し、それまでのその物質の個性ある仕事の全てを歪めていく。地球の意思に守られながらも、そのことに抵抗し続けた彼であったが、その力は、それを遥かに上回る負の能力に崩され、次々と破壊される。そして、何をしてもどうにもならないことを受容するしかない地球は、完全なる守りに入り、彼の大元となる原因の意思を、地球内部の中心に避難させることにする。それは、地球にとって、とても信じ難い厳しい現実となる。

彼は、13 個の陽子を持つ、金属性元素。地球の生命力が地上世界へと伝わり、流れ出す時の、その最も大変な場所で

ているということ。摂ってはならない食物からも自ずと離れていられ、感性も感覚も、自然体のそれになる。当然そこに、海の塩は無い。

思考が先行すれば、思考が通用しない地球の意思(望み)を感じることはなく、いつしか作り物の健康と平和の次元で、食の在り方も地球を離れる。思考は、思考をあたり前に自由にさせる中で感じ得た体験的知識の、その確認と伝達のために使われるもの。思考から始まる世界(次元)に、真の健康は無く、地球が知る本来の健康は、人間の思考には付き合わない。

不自然さも不健全さも知らない地球の望みを、自らの原因と重ねる。そのための材料は全て無有日記に在り、そこでの普通は、歪な普通をさらりと癒す。今回の人間時間をムダにするという生き方は、生命にとって有ってはならないこと。無有日記のひとつひとつのその原因を、地球の意思は通る。

「地球の真意」は、地球のための、地球が嬉しい実(実践)の姿。「再生」「復活」との融合と、「人間」や「仏陀の心」の理解を普通に、ここで、自らが地球になる。地球の全てが在る身体を活かし、地球を生きる。地球は元気になっている。

(by 無有 2/15 2019)

地球の真意（6）

1.地球を知り、地球を大切にしようとする姿勢は、人間世界の期間限定の思考に汚染されやすい。地球のために…と思うことからでしか動けない発想では、地球も哀しい。

そのことを知り、あたり前に地球を大切にすること。それが人間の普通であることを、頭からではなく、ありのままにその手前の想い(原因)から表現する。それへの難しさは、地球に生きる人間時間への抵抗でもある。

思考で地球を捉えようとする経験は、どれだけ時間をかけても、経験枠を出ることはなく、それゆえ、そこに在る(地球関わりの)結果としての事実のその原因の性質には触れることはない。つまり、そのための知識を積み重ねる経験は要らないということ。地球が嬉しい原因でいる自分を普通に生きる。必要とすべく知識は、地球に託されるようにして自然に訪れ、ムリなく自分のものとなる。

そうである自分をさりげなく実践する中で経験する、何気ないながらも、確かな感覚的理解。それは、向かわず求めずとも普通に為し得ることのその質の変化・成長無しには、何も変わらないということ。地球は、それを何より望んでいるということ。知ることにも質があることを知り、それ以前からすでにその原因が変化に乗っていることを確認する。そして、知ることを通して動き出す、そこでの原因の多次元化とそれへの責任を

楽しむ。

無有日記を通して、そのことをその意識もなく馴染ませてきている、これまで。それだからこその出会いをいくつも重ねてきている、変化し続ける、ここでの人間時間。その人間時間を支える地球時間に、新たに通り抜けようとする、(これまでが引き寄せた)この6章を捧げる。ここでの知識のその原因は、地球そのもの。

2.およそ39億年前、地球を目指してきた3種の粒子が、無数・無限に地に降り注ぎ、地球全体を覆うようにして、それは地中深くへと入り込む。地球は、経験の外側であるようなその出来事に為す術を持たず、それがどんな影響を及ぼすかも予想できないまま、ただそれまでの経験の原因からなる現実を守ろうと、磁気を強め、電流を勢い良く流れさせて、調和の基本を堅固にする。

しかし、どれだけそうであろうとしても、それが効いているのかどうかも分からない中で時は流れ、妙な負荷を地球は覚える。感触としての違和感は次第にその広がりを増し、それ程のことが起きているというその事実だけが進行する。受容と変化への原因は高められても、それへの対処が容易ではないことを、地球は知る。

時を経て、地球の生命体としての意思は、磁気の流れが、その自覚も持ち得ないままに滑らかではなくなってしまうことに気づかされる。そのあり得なさに地球全体が影響を